〈新刊紹介〉

『観経疏に学ぶ』玄義分（Ⅰ）（Ⅱ）

廣瀬　杲著

本書の基本姿勢は徹底して〝聞思〟である。しかし、その姿勢がわれわれ真宗学徒において、どれほど徹底されているであろうか。〝聞思〟という姿勢の困難さは、その持続のむずかしさ故か、或いはその〝聞思〟という姿勢が自己に課してくる厳しさに耐えられない故か、無意識のうちに〝聞〟と〝思〟が分離していくようである。そして、その結果として自然にそのどちらかに偏るのである。〝聞〟に偏るとき、人は無意識のうちに〝思〟という理性的厳しさを失い、情緒性に流れる。〝思〟に偏るとき、人は〝聞〟という姿勢を忘れ、人智による経論釈の組み換え、言葉の組み立てが、あたかも宗教の思索であるかの如く錯覚する。〝聞・思〟が分離するとき、そのどちらに偏るのも、ともに仏弟子の姿勢ではないのである。真に〝聞思〟に徹していくとは、〝聞〟という今現在における経言への領きの事実が、まさに生身（なまみ）の〝思〟（宿業の〝思〟）によって相続していくことである。

そこにあるのは、ただ聞無窮の一道である。聞即思である事実を自己に課す教法修学こそ、まさに善導その人の姿勢である。

真に〝聞思〟に生きるという、真宗学徒に要請されている〝厳しさ〟を、私は本書において改めて身に沁みて教えられる。本書は徹底して〝聞思〟という宗教心の思索に貫かれているのである。それが善導の宗教生命であることは言うまでもない。

もとより本書は、何の拘束もない学仏道場〝聞光学舎〟において、自由に語られたものの筆録である。講義録である。思索が自由であるということは、単に自由奔放ということではなく、現実と退引ならないかかわりをもって聞思されている故に、思索が生きているということである。その意味で、現代の講録と言っていいが、それは単に、仏教語で現代的表現がなされているというにとどまらず、より積極的に、言葉が生きていると言うべきであろう。あの難解な『四帖疏』玄義分に肉迫し、見事に咀嚼されている。善導大師を学ぶのに、その指南となる参考書が余りに少ない今日、この講義録が公にされることは、真宗学徒にとってばかりでなく、真宗及び真宗学の世界を知らんと欲する人にとって、又純正浄土教の精神を知らんと欲する人にとっても、よき道標となると思われる。講述は、高田専修寺蔵の親鸞加点本を底本としている。尚、本書の構成は、大略次の如くである。

○玄義分Ⅰ、（序論）「第一章、浄土真宗の大綱―親鸞教学における善導の位置」「第二章、独明の志願―五部九巻の造意」「第三章、観経の玄義」（本論）「第一章、勧衆と帰敬―十四行偈のこころ」「第二章、視座の確認―七門料簡」「第三章、観経の位置決定―序題門」「第四章、経題の名義―釈名門」「第五章、観経の宗教―宗教門」「第六章、説者と聴者―説人門」「第七章、求道の確認―定散門」

○玄義分Ⅱ、「第八章、仏言に帰す―経論和会門」「第九章、絶対現実へのめざめ―韋提得忍門」「第十章、仏事の成就―結文」

（四六版・通六〇七頁・法蔵館・（Ⅰ）二八〇〇円　（Ⅱ）二五〇〇円）

（大城邦義）